

27、(北越雪譜による)

二月になり野山一面の雪の中でも、

清水を流れる水は温かいようだ。

ゆえに雪が少しとけているところもあり、

そこに水鳥がやってくる。

これを見た二、三羽の雁がやってきて、えさを探し、食べた後に糞を残してえさ場の目印にしているのだ。

これのある地域の方言で雁の代見立てという。

雁はこのように仲間を連れてきて、えさを食べているのだ。

信頼できる友人がいる人でも、こちらが恥ずかしいと思うほど

立派なことである。

28、(一休はなしより)

一休和尚は、幼少の頃から、つねに変わり者で、たいそう利発だったとかいうことだ。

寺の師を、養そう和尚と申した。

ひいきの旦那がいて、いつもやって来て和尚から仏教について

学んだりなどしては、一休の利発なのを心地よく思っ、

時々冗談を言ったりして、問答などしたのだった。

ある時、例の旦那が皮の袴を着てきたのを、一休が門外でちら

っと見て、中へ走り入って、薄い板に書きつけ、立てたことに

は、

「この寺の中へ皮の類は堅く禁制である。もし革のものが入る時には、その身に必ずばちがあたるぞ」

と書いておいたのだった。

例の旦那はこれを見て、

「皮の類にばちがあたるならば、このお寺の太鼓はなんとなさるか」

と申し上げた。一休はお聞きになり、

「それだから、夜昼三度ずつ「ばち」があたるというわけで、そなたへも太鼓の「ばち」をあて申しましよう、皮の袴を着て

いらつしやるので」

とおどけて言われた。

29、(浮世物語から)

中国の梁の皇帝が、狩りにお出ましになる。

白い雁がいて、田んぼの中に下りて来ていた。

皇帝が自ら弓に矢をかけて、これ(白い雁)を射ようとなさるときに、通行人がいて、事情(皇帝が白い雁をしとめようとして

いること)を知らずに、白雁を追い立てて(逃がして)しまいま

す。

皇帝はたいそう怒って、その人を捕らえて殺そうとなさっ

るときに、公孫龍という臣下が諫めて言うことには、

「昔、衛の文公の時代に、全国的に大日照りになって三年経ったことがあります。これを占わせなされたときに、(占い師

が)言うことには、一人を殺して天に祀るならば、きつと雨が

降るだろう、と。文公が言うことには、雨を求めているのも、民のためである。今ここに人を殺してしまえば、人の道に反す

る行いだから、ますます天の怒りを受けるだろう。こうなった
ら、私が死んで天に祀ろう、とおっしゃる。その心が天の道理
にかない、にわかにも雨が降って、五穀が豊に(実って)、民は栄
えました。今、王様がこの白雁を尊重して人をお殺しになれば、
これは実に虎狼(欲が深く、残忍なこと)の類ではありませんか」
と申し上げたので、皇帝はとても感じ入って、公孫龍を尊び重
んじられた。

30、(平家物語による)

延喜の帝が、神泉苑におでましになって、池の水際に鷺がとま
っているのを、六位をお呼びになつて、

「あの鷺をつかまえて参れ。」とおっしゃったので、

「どうして、この鷺を捕らえることができよう。」と思つた

けれども、帝のお言葉ゆえ歩いて向かった。

鷺は、羽をととのえて、飛び立とうとする。

「帝の命令である、飛び立つな。」と言つたところ、

鷺は平伏して、飛び去らなかつた。これを抱きかかえて帝にさ
し上げた。帝はご覧あそばして、

「(鷺である)おまえが帝の命令に従つて、ここに参つたこと
は、殊勝である。」と言つて、(鷺を)五位に昇進させた。

31、(耳袋による)

鼓の名人の新九郎がまだ「権九郎」と名乗つていたころ、
鼓の練習を毎日していたが、いまだ奥義を習得するには至らな
かつた。

当時の権九郎には、長年召し使つてきた老女がいた。

彼女は毎朝、お茶を入れてくれるのだが、ある時、権九郎の鼓
がたいへん上達したことを語つたので、権九郎は滑稽に思つて、
我が職分(鼓のこと)の上達を知る理由を笑いながら尋ねたと
ころ、

「親御さまの新九郎さまの鼓を数年聞いておりましたら、毎朝
煎じている茶釜に音が響いて聞こえました。最近まで権九郎さ
まの鼓にはそんなことがありませんでしたが、ここ四日五日は
鼓の音が茶釜に響きましたので、ご上達を知つたのです」
と老女は答えた。

長年、鼓を聞いてきた耳だったから、微妙な音の良し悪しも
自然と分かつたのかと、権九郎も感嘆したという。

32、(沙石集より)

南都奈良に、智運房という寺僧がいたそうだ。

ある時に、向かい合った僧の住居が出火して時のことだが、智運房は大騒ぎし外へ出て、手桶にくんだ水を、自分の傍らにいた僧の首にかけたので、「どうしてこんなことをしたのだ」と言ったところ、「あなた様の顔に火が付いたに違いないと思つたので(水をかけました)」と言つたそうだ。火事の炎の光が、顔を照らして、あかあかと見えたのを、顔に火がついたと思つてしまった(に違いない)。

ある時に、若者たちが集まつて、酒宴した時のことだが、

(智運房が) お代わりの酒を買おうとして、酒瓶を持つて酒屋へ行き、程なく帰つてきたのだつた。

酒宴もおおいに盛り上がつて、酒瓶の酒をお銚子(堤子、デキヤンタ)に入れて見ると、浮き草が浮いている。

不思議なことと思つて飲んでみると、なんとただの水であるのだ。「これは一体どうしたことか、まつたくの水であるぞ」と聞くと、「まさか、そんなことは有りませぬ。すぐに汲んで来ましたのですから」と言う。「何をどうしたと言つているのかい」と聞くと、「今夜は朧月夜で、薄暗い状態です。雨のため道がすべりやすく、猿沢の池の端ですべて、酒瓶を池に落としてしまったのです。しかし直ぐに、その場所の池の底を汲みました。」

33、(鴨長明、発心集も文章による)

竜樹菩薩のおっしゃつたことには、「欲望がやまないのは、(心の) 貧しい人である。(栄華を) 求める心がないのは、心が満たされている人である。」とあります。

書写の達人が書いた言葉に、「肱を曲げて枕にする。(生きることの) 楽しみは、その(ような) 生活の中にある。何のために、(まるで) 浮き雲の(ようにはかない) 栄華を求めようか(いや、求めない)。」とあります。

また、ある書物には、「唐(中国)に1人の琴の師がいる。弦の張つていない琴をすぐそばに置いて、手元から離さない。(まわりの) 人が不思議に思つて、(そのようにする) わけを尋ねてみると、『私は、琴を見るだけで、ある曲が心に浮かぶものである。それで、弦が張つていないけれど、(私の) 心が慰められることは、演奏するのと(まったく) 変わらない』と言つた。」とあります。